American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレイション=花井祐介

第４回

常夏の世界を舞台に、人生観をほどよく刺激

Jimmy Buffett
'Margaritaville'

Jimmy Buffett
"Changes In Lattitudes, Changes In Attitude"
ジミー・バフェット
『きまぐれ航路』
ABC●ABC990［1977］
⇒MCA◎MCAD31070

「マルガリータヴィル」やジミー・バフェットと聞いて、ピンとくる人はどのくらいいるだろう。日本在住でマルガリータヴィルを口ずさめる人は、ほんのわずかに違いない。しかしジミー・バフェットは、アメリカではこの数十年、変わらぬ人気を誇る国民的アーティストだ。

彼は毎年、夏になるとツアーに出掛けるが、ほとんどがスタジアムのような大きい会場だ。そこに集まったファンは踊って騒いで、コンサートはまるでニューオーリンズのカーニヴァル、マルディグラみたいに陽気で盛大だ。日本で有名なウクレレ奏者、ジェイク島袋も彼のツアー・バンドのメンバーのひとり。演奏者もみんなアロハに裸足と、実にラフなスタイルでコンサートを繰り広げる。

実績では２００４年に発売したアルバム『ライセンス・トゥ・チル』が『ビルボード』の3ジャンルのチャートでナンバー1を記録。3ジャンルとは、ザ・ビルボード２００、カントリー・チャート、トップ・インターネット・アルバムだ。それなのに、日本でこのアルバムは発売されていない。昨年リリースされたアルバム『バフェット・ホテル』も『ビルボード』インディペンデント・チャートで1位になった。まさにカントリーからポップ、アダルトまで、ジャンルを問わずに売れるアーティストだ。なぜ彼がこれほどまでアメリカ人に好かれるのか。それはアメリカのフィロソフィーの基本に流れる"Works Hard, Plays Hard"を地で行っているから。仕事をやるときはやろう、遊ぶときは遊ぼう。時にはハメをはずして思いっきり楽しもう、彼の歌にはそんな気分にぴったりハマる陽気さが詰まってる。併せて、この状態は〝マルガリータヴィル〟と言われている。彼らファンにとっては、ジミーの歌はステイト・オブ・マインドなんだ。どんな嫌なことがあっても、そこに行けば抜け出せる。一時の現実逃避。もちろん、Works Hardがあって、はじめて成り立つことなんだけど。

僕は97年にサンフランシスコの屋外スタジアム、ショアライン・アンピ・シアターでの彼のコンサートへ行ったことがあるが、これがまさにマルガリータヴィル体験だった。観客はみなオウムの帽子をかぶり、カラフルな洋服を身にまとっている。どんな曲を演奏しても大合唱で、ノリノリ。サンフランシスコなのに、まるでメキシコへ行ってるような気分にさせてくれるんだ。僕はさまざまなリゾートへ足を運ぶが、バーやホテルのロビー、ビーチ沿いのレストランといったところに現われる流しのミュージシャンは、決まってジミー・バフェットの曲を演奏する。それほど、ジミーはアメリカ人にとって身近なんだ。

ジミーのファンはパロット・ヘッドと呼ばれている。直訳すれば、オウムの頭だ。彼らは人を助けるために自ら活動し、寄付をすることも惜しまない。ジミー・バフェットのようにね。

また彼には作家という顔もある。『ニューヨーク・タイムズ』の本のチャートでフィクション部門／ノンフィクション部門の両方でナンバー・ワンを記録した。そんな作家は今まで7人しかいない。つまり、アーネスト・ヘミングウェイやジョン・シュタインベックと並ぶ作家だ。しかも音楽のチャートで1位になった作家は、ジミー・バフェット以外にいない。今回はそんな彼の名曲「マルガリータヴィル」の登場だ。

ちなみにマルガリータとは、テキーラをベースに、オレンジの皮から作ったリキュールやライム・ジュースなどをシェイクし、ロックやストレート、フローズンで飲む南国気分のカクテル。アメリカでは夏になれば、当然のようにみんな飲みだす。僕はといえば、フローズンが定番だ。

またマルガリータヴィルのヴィルは、もともとフランス語でヴィレッジ（村）のこと。よく人の名前のあとにつけて使う。例えばグランヴィルといえば、グランという人がつくった村という意味になる。カントリー・ミュージックの街、ナッシュヴィルもそうだ。ほかにも考え方や生き方を表現する手段として使うときがあって、プレゼントヴィル（pleasantville）と言えば、心地いい村や夢に出てくるような平和な村のことを表現するときに使う。He lives in retroville. と言えば、彼はレトロな世界で生きているなんていうふうにも使える。

さて、歌詞はこんな感じで始まる。

Nibblin' on sponge cake
watchin' the sun bake
All of those tourists covered with oil
Strummin' my six string on my front porch swing
Smell those shrimp
They're beginnin' to boil

スポンジケーキを食べて暮らす。理解できないかもしれないが、アメリカではスポンジケーキは手軽に手に入って、すぐにおなかを満たすものって感覚だ。'nibblin'"とは少しずつ食べること。お金がないから大事に食べないとねって感じだろう。そして太陽はサンオイルだらけの観光客を焼いている。僕はデッキにあるブランコに座って、6弦のギターを弾いている。もうすぐ茹であがるシュリンプの匂い……これは日焼けした観光客にかけてるんだ。それから、ケーキをあえてスポンジケーキと言っているのは、植物のスポンジが暖かい国にあるものだから、南国気分を出すためかもしれない。本当はパウンドケーキのほうがポピュ

●ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE　ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。

ラーだからね。ジミーがスポンジが好きだからかもしれないけど(笑)。

Wasted away again in Margaritaville
Searchin' for my lost shaker of salt
Some people claim that there's a
woman to blame
But I know it's nobody's fault

ここがサビだ。またもや俺はマルガリータヴィルで酔っぱらってる。でもこれは悪酔いじゃなくて、幸せな心地よい酔い。なくしてしまった、塩のシェイカー。シェイカーといっても、実はロマンが詰まっている。もちろんマルガリータには塩が必要だけど、きっと何かすごく大事なものを探しているのだろう。ロスト・シェイカー・オヴ・ソルト……、これはまるで冒険映画に出てくるようなロスト・シティー・オヴ・ゴールドのようなイメージなんだろう。それとも、噂で聞いたことがある海賊の宝物か。

すでに、マルガリータヴィルの世界で酔っぱらってる。それを女のせいだと言う人もいるけど、誰のせいでもない。どうでもいいよね、そんないい加減さとほろ酔い気

分が伝わってくる。

Don't know the reason
Stayed here all season
With nothing to show but this brand
new tattoo
But it's a real beauty
A Mexican cutie, how it got here
I haven't a clue

なぜかわからないけど、このシーズンはずっとここで過ごしてしまった。ここにいたから、何か学んだことがあるのではない。女ができたのでもない。手に入れたのは、このメキシコ人のかわいい彼女のタトゥーだけ。でもどうやって、いつここに彫ったのかも覚えてない。

暖かい村だとよくあることだよね。帰ろうとは頭のなかで思っていても、身体がその村から離れられない。南の海岸の村とはそういうものだ。わざわざ、飛行機に乗り遅れたりね。心地よくて、昔の生活には戻りたくなくなってしまうんだ。

Wasted away again in Margaritaville

Searchin' for my lost shaker of salt
Some people claim that there's a
woman to blame
Now I think, hell it could be my fault

サビの部分だが、最後の一行が変わっている。女のせいだという人もいるけど、俺のせいかもってね。

I blew out my flip flop
Stepped on a pop top
Cut my heel, had to cruise on back
home
But there's booze in the blender
And soon it will render
That frozen concoction that helps me
hang on

最初の一行の'blew out'という言葉は、タイヤがパンクしたときに使うもの。フリップ・フロップはゾウリのことだから、ゾウリがだめになったってことだ。そして、裸足で歩いてたらポップ・トップ(昔の缶についていたプル・トップのこと)を踏んでかかとを切ってしまったから、家までゆっくり歩かなければならなくなった。クルーズ・オン・バック・ホーム……。クルージングするように、家までゆっくり歩いて帰ろう。普通、クルージングとは車でゆっくり、あてもなく街を走り回ることを言うが、ここでは歩いて行くことに使っている。クルーズだからといって、船ではないんだ。

そして家に戻れば、ブレンダーにはブーズ(酒)が入ってる。そしてまるで仕方ないなというように、俺をすぐにいい気分にしてくれるフローズンを出してくれるんだ。そして俺に、これからやっていく自信をつけてくれるんだ。

Wasted away again in Margaritaville
Searchin' for my lost shaker of salt
Some people claim that there's a
woman to blame
But I know, it's my own damn fault
Yes, and some people claim that
there's a woman to blame
And I know it's my own damn fault

最後の一行がまた違う。女のせいだと言う人もいるけど、俺のせいだ。やっぱり自分で責任を取らないと。

マルガリータヴィルは1977年にリリースされた"Changes In Lattitudes, Changes In Attitude"のアルバムのなかの一曲だ。緯度(lattitude)が変わると、態度(attitude)が変わる。つまり赤道に近くなるほど、のんびりして生き方も変わるという意味だ。アルバムは『ビルボード』のチャートで12位まで行き、ミリオン・セラーになった。シングルは8位を記録した。アメリカでは「マルガリータヴィル」がラジオでかかった回数がなんと40万回を超えるという。3分の曲だから、20万時間流れているというわけだ。これは21年間に匹敵するというから、脱帽だ。日本では残念なことに、きっと100回かかっているかどうかだろうけど。

僕は日本でもジミー・バフェットがポピュラーになることを願っている。実は僕は夏になれば、彼のブランドのデッキ・シューズを履いているし、彼の本を片手に、フローズン・マルガリータを飲んでいる。密かに日本のジミー・バフェットと呼ばれたいと思ってるんだ(笑)。ラジオ番組でも結構かけているんだよ。

MARGARITAVILLE Words & Music by Jimmy Buffett
©Copyright by CORAL REEFER MUSIC All Rights Reserved. International Copyright Secured.
Print rights for Japan controlled by K.K. MUSIC SALES 日本音楽著作権協会(出)許諾第1008881-001号